

「相田みつを詩集」の授業テキストとしての可能性

——「日独比較研究クラス」（フンボルト大学留学生）の場合——

佐原雅通

1. はじめに

本学国際教育センターで、20年以上にわたってドイツ人留学生の日本語教育に携わってきた。授業で重点を置いたのは、「独文和訳」と「聴解」の二つである。「独文和訳」では、ドイツのニュースサイトから最新の記事を選び、作成した日独対照単語リストを使って日本語に翻訳する訓練をした。「聴解」で取り上げたのは、NHK手話ニュースである。ニュースの内容を書き起こしたプリント教材を使い、「聴き取り」の反復練習をした。手話ニュースの漢字にはふりがなが付いているので、内容をスピーディーに理解できる利点がある。ニュース記事と手話ニュースでは日独が共通して抱えるアクトエアルなテーマを扱ったので、ドイツ人留学生は関心を持って積極的に授業に取り組んでいた。

ただ、教材として日独のニュースを扱っただけでは、「日独比較」の授業目的を十分に達成したことにはならない。言語レベルで日独両言語を対照するだけでなく、比較文化の視点からニュース記事以外のテキストを使用して両文化の差異についても掘り下げる必要がある。しかし、春・秋セメスターに週1回の授業のため、扱えるテーマの量は時間的に限られている。時間の制約の中で、比較文化を扱うテキストを選ぶとすれば、小説よりも詩のほうが適切であろう。詩といっても、日常から乖離した世界を形象化した抽象的な内容の作品は不適切である。口語体の日本語で日本人の日常感覚が反映された詩のほうが好ましい。

この意味で、最も有力な選択肢は「相田みつを詩集」である。相田みつをの詩は日常会話の日本語で書かれていて、ドイツ人留学生にも取り組みやすい。また詩が短いこともあり、授業の予習の負担が軽くなることも利点といえる。授業で相田みつをの詩を扱ってみると様々な反応があり、ドイツ人留学生と共に日独の自然観・世界観の相違について議論することができた。授業教材が短い詩であっても、キリスト教文化圏とは異質の日本文化と日本人の感性の一端に触れることができたように思える。

本論では、ドイツ文学の作品を引用しながら日独の自然観、世界観、人間観を比較し、「相田みつを詩集」の授業テキストとしての可能性について考察してみたい。

2. キリスト教文化圏の自然観と日本の自然観

まずキリスト教文化圏の自然観と日本の自然観との相違を考える上で、ドイツの哲学者エーリッヒ・フロム（1900～1980）の考察が示唆に富んでいる。

フロムは『持つことあるいは在ること』（Haben oder Sein）の「一瞥」の中で、禅研究家の鈴木大拙（1870～1966）の言葉を引用しながら、西洋と東洋の自然観の差異について鋭く分析している。鈴木は1957年にメキシコ自治国立大学医学部精神分析教室の主催で講演を行なった。講演は英語で行われ、「禅と精神分析」がテーマであった。

講演の冒頭で、鈴木はイギリスのヴィクトリア朝時代の詩人アルフレッド・テニスン（1809～1892）と松尾芭蕉（1644～1694）を対比し、東洋の自然観の独自性について論述した。その際に引用されたのが、テニスンの詩「朽ちた塀の花」（1869）である。

ひび割れた壁に咲く花
私はお前を割れ目から摘み取る
私はお前を根ごと手に取る
小さな花よ—もし私が根だけでなく、お前のすべてを理解できれば
私は神が何か、人間が何かを知るだろう¹⁾

鈴木は続いて芭蕉の次の句を例示し、日本古来の伝統的な自然観をテニスンの対極に位置づけた。

よくみればなずな花咲く垣根かな²⁾

この詩と句を引用したフロムの解釈を敷衍すれば、テニスンの詩では花を介して、神と人間の真理に到達することが主要なテーマになっている。「花を根ごと摘む」という行為は肯定され、「自然の死」は顧慮されていない。神と人間の本質を理解するために、花を「持つこと」が前提になっている。自然に対する人間至上主義が明確に表われているといえる。

それに対して、芭蕉の句には「花を摘む」という発想はまったくない。花が垣根に「在ること」が注視され、芭蕉は花に触れることさえしない。咲く花の自律的な存在価値が尊重され、自然を観察する人間は、自然と対等な存在として位置づけられている。

フロムは鈴木の見点に独自の考察を加え、テニスンと芭蕉の自然観の中間に位置する作家としてヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ（1749～1832）を挙げる。引用されたのはゲーテの「見つけた」（1813）という詩である。

森の中を歩いた
ただひたすらに

とくに何をさがすでもなく
ただ心のおもむくままに

木陰に小さな花が
一輪咲いていた
星のように輝き
瞳のようにきらめいていた

私とその花を手折ろうとすると
花はか細い声でいった
「私は折られて
萎れてしまうの？」
私は花を根ごと
すべて掘りだして
きれいな家の
庭に運んだ
そして花を静かな場所に
植えかえた
今すっかり根をおろし
きれいな花を咲かせ続けている³⁾

ゲーテの「花」に対する姿勢は、テニスの西洋の自然観と芭蕉の日本の自然観の橋渡しとして位置づけられる。「私」は森を歩いて花を見つけるが、芭蕉のようにただ花を傍観するだけではない。テニスと同じように花を手折ろうとすると、花に「私は折られて萎れてしまうの？」と問いかけられる。「私」は思いとどまり、花を根と一緒に自宅に持ち帰る。

そして花は庭に植えられて咲き続けることになる。ゲーテの詩では、花はテニスの詩のように人間の独善的な自己目的のために犠牲にされていない。一輪の花の命を人間の生命と同じように尊ぶ自然観が形象化されている。

3. ドイツ文学の自然観と相田みつをの自然観

テニスやゲーテと同じように、相田みつをにも花と根の関係をテーマにした詩がある。例えば、以下の詩が挙げられる。

花を支える枝
枝を支える幹
幹を支える根

佐原雅通

根は見えねんだなあ⁴⁾

この詩では、見えない「根」が花全体を支える存在として、「花」、「枝」、「幹」の上位に位置づけられている。それと対照的に、テニスンとゲーテの詩で中心的な役割を演じているのは、あくまでも「花」である。「根」は「花」の付随的な存在でしかなく、「根」そのものに自律的な存在価値が認められているわけではない。花を生み育て花を支える「根」という発想は相田みつをに限らず、「縁の下の力持ち」という日本固有の価値観をあらわしている。

相田みつをは「花」をテーマにした詩も書き残している。例えば、以下の二編の詩である。

自分の花

名もない草も実をつける

いのちいっぱい

自分の花を咲かせて⁵⁾

懸命

谷間の

白百合の花は

だれにも

見てもらえないのですが

少しのかけひきもなく

精いっぱい

いのちいっぱいの

美しさで

懸命に咲いています⁶⁾

留学生は二編の詩をドイツ語に正しく翻訳することができ、また詩の内容も容易に理解することができた。これは、日本語を専攻しているドイツ人だから理解できたという意味ではない。これらの詩は、日本語や日本文化を全く知らない一般のドイツ人の感性にも響き、直感的に理解できる。

なぜなら、「花」が擬人化される詩の伝統は、ドイツ文学史に貫流しているからである。特に中世の詩であるミンネザングやドイツ・ロマン派の詩・小説に顕著といえる。「花」を擬人的に描写する自然観は、歴史の変遷を経てドイツ人の精神構造に深く刻印されてきたのである。

花・植物を擬人的に形象化する文学は、ゲーテの時代までに限定されたことではない。その伝統は、19世紀以降のドイツ文学にも連綿と受け継がれている。例えば、19世紀のオーストリアの文豪アーダルベルト・シュティフター（1805～1868）である。シュティフターの自然観は現代のエコロジー思想の先駆けと高く評価されている。1844年に『習作集』の第二巻に収めら

れた作品に『喬木林』がある。作品の時代背景は17世紀の三十年戦争（1618～1648）であるが、自然の円環回帰する生態系の意義を洞察した箇所が随所に見受けられる。例えば、次の一節である。

「… 人間の世界で既に何年も前から戦争と破壊の喧騒が荒れ狂っていることは信じ難いです。そこでは、精緻を極めた掛替えのない授かり物である人命が、まさに見境なく無分別に奪われています。森はどんなに小さな花々も、なんと苦心して丹念に育み護っていることでしょう。」⁷⁾

人命が無残に犠牲にされる三十年戦争と、どんなに小さな植物の生命も大切に育まれている森の生態系が対比されている。さらに他の箇所でも、動植物の生態系を脅かす人間について批判する言葉は厳しさを増す。

「… 人間は主の動物と植物を悪用しています。人間は高慢にも比類のない者と思いがっているからです。そして愚かにも、動植物の言葉と本性を学びにその世界と棲家に決して入ろうとしません。―――」⁸⁾

ここで注目すべきは、「動植物の言葉と本性を学ぶ」という表現である。ゲーテの詩の中にも「動植物の言葉」に耳を傾ける描写があった。「私」が花を手折ろうとして、花に「私は折られて萎えてしまうの？」と問いかけられた場面である。「私」は花の言葉を聞き入れ、花を根ごと自宅に持ち帰る気持ちに変わった。花の言葉を理解するゲーテと、「動植物の言葉と本性を学ぶ」シュティフターの自然観は、共通して「森の思想」に貫かれている。それは、森が「どんなに小さな花々も、なんと苦心して丹念に育み護っている」と称えられているように、自然の円環回帰する恒常的な営みに寄せる畏敬の念である。

4. ゲーテの人間観と相田みつをの人間観

相田みつをの詩が多く日本人を引きつけているのは、前述した自然観とならんで人間観であろう。詩の中で、人間観の多くは人間と自然とを対比するかたちで吐露されている。前述したように、ドイツ人留学生は相田みつをの自然観については理解を示すことができた。しかし、相田みつをの人間観となると、キリスト教精神の伝統の中で培われてきたドイツ人の人間観と全く相容れないものである。

したがって、相田みつをの自然観を理解できたドイツ人学生も、その人間観となるとドイツとの大きな懸隔を感じざるを得なかった。日独の人間観の文化的な差異について、まずゲーテの作品を挙げて比較・分析してみたい。まず取り上げたいのは、ゲーテの二部構成の長編戯曲『ファウスト』である。第一部は1808年、第二部はゲーテの死の翌年1833年に発表され、ゲーテのライフワークであると同時に代表作といえる。舞台は『ファウスト』第一部の「天上の序曲」である。主（神）と誘惑の悪魔メフィストフェレスは、ファウスト博士の魂を悪の道へ引きずり込めるかどうか賭けをする。注目したいのは、主の次のような言葉である。

「人間は、努力する限り迷うものである。」⁹⁾

「善い人間は暗い衝動に駆られても正しい道を忘れることはない。」¹⁰⁾

「人間は、努力する限り迷うものである」という言葉は、一見すると相田みつをの詩と類似性があるような印象を与える。しかし、その判断は早計である。ファウスト博士は第一部の「夜」の場面で、続けてきた研究の結果に失望して嘆く。

「ああ やっと哲学，法律学，医学，
よけいな神学までも
研究し尽した，一途に没頭して。
いまここに立ちつくす自分は哀れだ。
前より少しもえらくなっていない。」¹¹⁾

主人公であるファウスト博士の「迷い」の深淵を理解するためには、まずヨーロッパ中世の大学の歴史的背景を知ることが不可欠である。当時、ヨーロッパの大学は、哲学、法学、医学、神学の四学部で構成されていた。まず七自由科と呼ばれる三学（文法、修辞学、論理学）と四科（算術、幾何、天文、音楽）を学んだ後、最初に哲学部に進むことができた。哲学を修了後に、神学、法学、医学の三学部へ進学するシステムであった。

したがって、ファウスト博士のように、この四学部を修めればすべての学問を究めたといえたのである。しかし、ファウスト博士は学問を修めれば修めるほど知のラビリンスに迷い込み、「世界を最も奥深いところで統べているもの」を究明できず無力感に陥る。主の言葉は、そのような絶望の淵にあるファウスト博士に向けられたのである。

世界の真理を究めようとするファウスト博士の不屈の自我は、神と人間を理解する目的で花を摘み取ったテニスの探究心を想起させる。ファウスト博士とテニスの「私」に共通する世界観・人間観は、ヨーロッパ精神を形成してきたキリスト教と深く関わっている。キリスト教では、神を頂点とした被造物の位階構造は不可侵の聖域であった。「神」→「人間」→「自然」の厳格な序列である。したがって、「神の似姿」である人間と「人間に利用され、支配されるべき自然」は截然と区別されていた。人間は神から、世界の被造物を支配し、管理する特権を委ねられていたといえる。つまり、ファウスト博士とテニスの「私」には、人間は神の被造物である世界・自然を理解できる唯一の特権的な存在であるという共通認識があったのである。

このような人間の特権意識から、ヨーロッパで自然は人間の研究対象となり、学問として自然科学の土壌が形成されていくことになる。しかし、それは同時に、テニスの「花を摘み取る」行為が端的に示しているように、人間の自己目的の自然利用・搾取と表裏一体になっていたのである。

単独で全世界と対峙できるヨーロッパの強烈な人間至上主義は、相田みつをの人間観とは全く相容れない。例えば、相田みつをは次の詩で花と人間を対比している。

花が見ている

庭の木蓮が咲きました
白い花です
人間のことばでは表現できぬ
浄らかな白い花です
わたしはいま花の下に立って
木蓮の花を見えています
木蓮の花もわたしを見えています
損だとか得だとか
勝ったとか負けたとか
金が有るとか無いとか
という人間の分別心とは
全くかわりのない
純白な花のところで
人間のわたしを見えています

気が小さくて臆病で
そのくせ自己顕示欲だけは
人一倍強い
おまけに美女にも弱い
そしてうそもよく言う
どうしようもない人間のわたしを
木蓮の白い花が見ています¹²⁾

この詩の「わたし」には、「木蓮の花」を眼前にして「世界を最も奥深いところで統べているもの」を究めようとする探求心はまったくない。探求心には不可欠な「自己顕示欲」さえ否定的に捉えられている。「木蓮の花」は、人間に利用・搾取される対象ではなく、「わたし」の日常の邪念を忠実に映し出す鏡のような存在である。「わたし」は、キリスト教で人間の下位に位置づけられる自然に教え諭され、「どうしようもない人間」を自覚させられる。「わたし」が自認する「どうしようもない」という表現は、たしかに意味が曖昧である。しかし、相田みつをの「あじさいの花」を扱った詩がその意味を明らかにしてくれる。

はずかしい

あじさいの花を
みているわたし
あじさいの花に
みられているわたし

花にみられてはずかしい
にんげんのわたし¹³⁾

つまり、「どうしようもない」の意味は、二度も使われている「はずかしい」という感覚と同義と理解できる。日本独特の「恥の文化」自体が、特にキリスト教文化圏の欧米人には理解しがたいものである。さすがに日本語を専攻しているドイツ人留学生でも、「恥の文化」の一端を形象化した「花にみられてはずかしい」という表現はドイツ語に翻訳できなかった。

その一つの理由は、「はずかしい」感情を引き起こす原因が詩の中で不明だからである。それ以上に決定的な理由は、日独の人間観の大きな懸隔に起因している。ここで、さらにヨーロッパの人間観と日本の人間観に決定的な差異をもたらした宗教的背景について考察してみたい。

5. キリスト教とヨーロッパの人間観

17世紀にヨーロッパで近代科学が成立したが、その思想的基盤はキリスト教の世界観に起因していた。キリスト教思想では、宇宙・自然は神の意志を反映し、数学という言葉で書かれた「第二の聖書」であった。ベーコンの「自然支配」と「実験」の概念、そしてデカルトの「機械論」の思想的支柱は、人間中心の「自然支配」である。それは、人間が神から支配する権利を授かった自然を「実験」という拷問にかけて解剖し、人間の自己目的のために搾取するという思想であった。

この点に関して、ゲルマニストのK. ケヒーは「実験を、拷問による証人尋問の裁判とするベーコンのメタファーに含まれる“vernehmen”という言葉の二義性」に着目する。

「“vernehmen”という言葉の二義性」は、動詞“vernehmen”に「尋問する」と「聴く」の二つの意味があることを指している。ケヒーによれば、ロマン派の自然観は、自然科学の底流にある「実験」という名の拷問による「自然支配」と一線を画している。ケヒーはさらに言葉が続ける。

「“vernehmen”を裁判の強制手続と関係づける代わりに、ロマン派は“vernehmen”を敬虔に未知の言語を聴くという意味で理解している。」¹⁴⁾

ゲーテは、花の「私は折られて萎れてしまうの?」という言葉聞き入れた。まさに「敬虔に未知の言語を聴く」というロマン派の自然へのアプローチを想起させる。ゲーテは全被造物の位階階級の頂点から自然を睥睨したのではなかった。ゲーテの自然研究は「自然支配」ではなく、生涯にわたって「自然諸力の相互作用、生命ある動植物界に及ぼす無生物界の影響と調和」の究明にあった。

しかし、テニスの詩の「私」とファウスト博士に象徴されるように、宇宙・地球・自然を統べる太古からの壮大な法則と対峙できる存在は、神から被造物で最高位の特権を授かった「人間」だけである。ゲーテの世界観にも、やはり「神」、「人間」、「自然」を峻別する伝統的なキリスト教のパラダイムは厳然と存在していたのである。

全世界と単独で対峙するファウスト博士の強靱な人間像と比較すると、相田みつをの詩では人間の「弱さ」という表現が頻出する。例えば、次の二編の詩である。

いざとなると
人間は弱い
からねえ
人間のわたし¹⁵⁾

むりをしないで
なまけない
わたしは
弱い人間だから¹⁶⁾

「人間のわたし」と「わたしは弱い人間だから」の「わたし」を、相田みつをと同一視することは早計である。むしろ、相田みつを自身に限定されないすべての人間を意識した一般論と理解する方が妥当であろう。次の「諦念」という詩が、相田みつをの人間観を端的に示しているからである。

諦念

なんでもいいんだよ
ともかく一所懸命やって
みることだ
いのちがけでやってみることだ
そうすれば 人間の
不完全さが よくわかる
自分の至らなさが よくわかる
骨身にしみて よくわかる
頭でなく からだ全体で
よくわかる
諦念の世界は そこから
ひろがってくる
手を合わせずには
いられない
諦念の世界が¹⁷⁾

この詩では、タイトルが示しているように諦念がテーマになっている。「一所懸命やってみること」あるいは「いのちがけでやってみること」は一見すると、ゲーテやテニスの「世界第6号（2016）

を最も奥深いところで続べているもの」への不断の探究心を想起させる。しかし、この二つの努力は徒労に終わる。相田みつをの「人間」が最終的に認識するのは、「人間の不完全さ」でしかない。敗北感に苛まれるどころか、「諦念の世界」に恭順に従い、「手を合わせずにはいられない」祈りの境地に達している。人間が単独で全身全霊をかけて世界と対峙・対決するヨーロッパの厳しい個人主義とはまったく相容れないといえる。

先述したゲーテの「人間は、努力する限り迷うものである」という言葉の意味は、『ファウスト』第二部の最終局の場面でさらに明確になる。天使たちは次のように歌う。

「誰であれ、常に高きを求めて努めはげむ者を、私たちは救うことができます。」¹⁸⁾

絶えず高みを求めて努力を惜しまず邁進する人間は、「迷い」から解き放たれ、究極的に救われることが示されている。ファウスト博士は、世界の真理を把握するという壮大な目標を掲げて不断の努力を続け、世界の中で「神の似姿」を体現しようとする強靱な人間像を浮き彫りにしている。

それに対して、相田みつをの「一所懸命」は自己求心的に「人間の不完全さ」の認識に向かい、ゲーテやテニスの飽くなき自己実現のベクトルと真逆である。つまり、相田みつをの人間観は、個人が世界と対峙・対決し自己形成・自己発展を志向するキリスト教の人間観の対極に位置しているといえる。

6. 相田みつをとニーチェ

相田みつをは、詩作で「人間の弱さ」だけをテーマにしているわけではない。強い意味を表わす複合名詞「完全燃焼」を使って、直向きに自己実現を追求するヨーロッパの人間像を想起させる詩も残している。例えば、以下の詩である。

わたしは一生迷える
凡夫のままでいい
うそかけひきのない
自分自身の
いのちを
完全燃焼して
ゆけば
それでいい¹⁹⁾

この詩では、いのちの「完全燃焼」がテーマである。相田みつをは「不とわたし」の中でも、「完全燃焼」について言及している。

「自分が自分になりきるといことは、いま、ここの、自分のいのちを完全燃焼して生きる

—ことです。』²⁰⁾

相田みつをには珍しく、強い言葉で人生の指針を示しているような印象を受ける。しかし、その「完全燃焼」の前提になっているのは、「善悪、大小、かねの有る無し、社会的地位の上下、などという人間の作った相対的な価値観を一切やめてみること」²¹⁾である。これは、あくまでも個人レベルで様々な既成の価値観を棄てる自己の内面の問題でしかない。人間の価値体系を根底から打破すべく、単独で敢然と既存社会に立ち向かうヨーロッパ的な対決姿勢とは無縁といえる。哲学者フリードリヒ・ヴィルヘルム・ニーチェ（1844～1900）が形象化した「完全燃焼」と比較すると、キリスト教文化で培われた強烈な個人主義との差異が一層際立つ。ニーチェは『悦ばしき知識』の中で、「エッケ・ホモ（この人を見よ）」²²⁾と題した詩を書き残している。

エッケ・ホモ

そうだ！私は自らの生い立ちを知っている
私は炎のごとく飽くことなく燃え続け、身を焦がす
私が掴むものはすべて光になる
私が離すものはすべて炭になる
— 私はたしかに炎なのだ

ニーチェの「私」は、飽くなき生への衝動に駆り立てられ、全世界と対峙・対決することに妥協を知らない。まさに究極の自己実現が自己破壊と表裏一体になった強烈な人間像といえる。相田みつをの「自分」も「完全燃焼」して生きようとしている。しかし、ニーチェの「私」のような自己破滅型の強靱な精神とは無縁である。なぜなら、次の詩「ただいるだけで」から、相田みつをの理想の人間像が「癒しの存在」であることが明らかになる。

ただいるだけで

あなたがそこに
ただいるだけで
その場の空気が
あかるくなる
あなたがそこに
ただいるだけで
みんなのところが
やすらぐ
そんな
あなたにわたしも
なりたい²³⁾

詩中の「あなた」は、ニーチェに象徴される全世界と不断に対峙・対決することを自負する「超人」の対極に位置する人間である。自己実現の第一歩ともいうべき「わたし」の発言や主張は一言も吐露されていない。それどころか、相田みつをは、「ただいだけで」まわりの人心を癒す「あなた」を人間の理想像とみなしている。

ドイツ人留学生はこの「癒し」の人間像がまったく理解できず、いうまでもなくドイツ語に翻訳することもできなかった。ドイツの学校教育で重要な柱の一つは、生徒の主体性を尊重し、批判精神を育成することである。小学校から意見を論理的に発表する能力は、ペーパーテストの点数以上に高く評価される。積極的に発言や主張を展開して自己表現の能力を高めることが、人間形成・人間確立の上で最も重要視されているのである。したがって、「発言しない人間が他の人間を癒す」という感性はドイツ人には備わっていない。相互のコミュニケーションを前提としない「癒し」の人間像は、ドイツ人にとって理解を超えたカルチャーショックといえる。ドイツの人間生活の中で、「沈黙」はネガティブな価値しかなく、沈黙する人間はまさに「壁の花」(Mauerblümchen)と揶揄されることになる。

7. まとめ

以上のように見てくると、これまでの「日独比較研究クラス」の授業で相田みつをの詩集を扱って、二点のことが明らかになった。まず相田みつをの自然観については、ドイツ人留学生も理解でき、容易にドイツ語に翻訳することができた。それに対して、相田みつをの世界観・人間観の多くは、ドイツ人の感性に直感的に響くことはなく、容易には理解できないものであった。しかし、研ぎ澄まされた繊細な日本人の感性と、人間の機微に通じないドイツ人の感性という対立図式の捉え方は、留学生に対する日本語教育にとって生産的ではない。10年以上前と比較すると、ドイツ人留学生の相田みつをに対する評価は変わってきている。当時、相田みつをの詩を授業で扱うと、ドイツ語で“Kitsch”という一語で内容を否定されることが一般的であった。この場合の「キッチュ」は、「高い芸術性を備えていない低俗な作品」という意味である。

しかし、徐々に相田みつをの詩の独特な世界に関心が高まり、レポートのテーマに選ぶ留学生も出てきている。留学生にみられる変化は、日本語の語学力が向上してきたということではない。むしろ、ヨーロッパ社会に及ぼしてきたキリスト教の影響力が低下してきたことと関係があるように思える。ドイツの場合、キリスト教会からの脱退者に歯止めがかからない。「ドイツの教会脱退」のデータによると、旧教・新教の脱退者の総数は以下のように推移している。2010年：326,443人、2011年：267,985人、2012年：256,530人、2013年：355,356人である。2014年は旧教だけで217,716人で過去最高を記録している²⁴⁾。

ドイツの『ヴェルト紙』(2015年5月23日)によると、西ヨーロッパでは年を追うごとにキリスト教の凋落が著しくなっている。ドイツにおける旧教・新教の新生児の洗礼率の変遷をみると、いっそう明確になる。ベルリンの壁が崩壊した直後の1990年には、合わせて75.8%であった。しかし、2000年の68.8%を経て、2010年には58.9%に急降下している。この低下傾

向は、現在もなお続いている²⁵⁾。ドイツ人の精神的支柱であったキリスト教の影響力の翳りはマイナス面だけではないように思える。キリスト教圏以外の異文化を先入観なく許容する新しい精神的な素地を育むプラス面が生まれてくるかもしれない。

近年になって地殻変動を起こしている宗教上の社会背景は、ドイツ人氣質に影響を及ぼすはずである。今後、1990年のドイツ再統一を実体験していないドイツ人の新世代が、ドイツにおける日本語学習者・研究者の多くのパーセンテージを占めるようになってくる。日本語の詩で形象化された日本独自の世界観・人間観が感覚的に拒絶されることは少なくなるだろう。日本人の独特な感性を柔軟に受け入れる精神的な許容度も徐々に高まっていくのではないだろうか。そして同時に、単語・語彙レベルで日本語に込められた含蓄の深さへの認識がいっそう高まり、日本語の修得で相乗的な効果も期待できると思える。

相田みつをの詩の評価については、毀誉褒貶が相半ばしているかもしれない。しかし、日常レベルのさりげない日本語で直感的に日本人の世界観・人間観を紡ぎ出す短い詩は、ドイツ人の感性には未知の衝撃的な体験といえるだろう。日常レベルの日本語に対する語感が養われ感性も磨かれれば、日常語で構築された日本人の世界観・人間観に対する理解も徐々に深まっていくと思われる。相田みつをの詩は、ドイツに限らずキリスト教文化圏に属する欧米の留学生が日本人固有の世界観・人間観を理解する上で、新たな道標となるはずである。

注

- 1) Erich Fromm: Analytische Charaktertheorie, Band II. Deutsche Verlags-Anstalt, Stuttgart 1980, S. 285.
- 2) Ebd.
- 3) Ebd., S. 286.
- 4) 相田みつを (2000) 『相田みつを作品集 ①にんげんだもの』文化出版局, p. 8.
- 5) 同上, p. 45.
- 6) 相田みつを (2000) 『生きていてよかった』ダイヤモンド社, p. 22.
- 7) Adalbert Stifter: Der Hochwald.
In: Werke und Briefe, historisch-kritische Gesamtausgabe, hg. v. A. Doppler und W. Frühwald, Band 1, 4. Studien. Buchfassungen, Verlag Kohlhammer, Stuttgart u. a. 1980, S. 227.
※(以下 Bf. と略記)
- 8) Der Hochwald, Bf., S. 268f.
- 9) Johann Wolfgang Goethe: Faust. Texte, hg. v. Albrecht Schöne. Deutscher Klassiker Verlag, Frankfurt a. M. 1994, S. 27. 筆者訳
- 10) Ebd., S. 28. 筆者訳
- 11) Ebd., S. 33. 筆者訳
- 12) 相田みつを (2000) 『相田みつを作品集 ③雨の日には』文化出版局, p. 75.
- 13) 相田みつを (2006) 『じぶんの花を』文化出版局, p. 22.
- 14) K. Köchy: "Dan Ganze der Natur", in: HiN – A. v. Humboldt im Netz (Potsdam-Berlin) III, 5 (2002), S. 7.
- 15) 相田みつを (1998) 『生きていてよかった』ダイヤモンド社, p. 64-65.
- 16) 同上, p. 75.
- 17) 相田みつを (2005) 『しあわせはいつも』文化出版局, p. 66-67.

- 18) Johann Wolfgang Goethe: a. a. O., S. 459.
- 19) 相田みつを (2000) 『相田みつを作品集 ③雨の日には』 文化出版局, p. 4.
- 20) 相田みつを (2000) 『生きていてよかった』 ダイアモンド社, p. 36.
- 21) 同上
- 22) Friedrich Nietzsche: Die fröhliche Wissenschaft. 2. Band, Carl Hanser Verlag, München 1966, ※ S. 32.
- 23) 相田みつを (2000) 『相田みつを作品集 ②一生感動 一生青春』 文化出版局, p. 40.
- 24) <http://www.kirchenaustritt.de/statistik>
- 25) <http://www.welt.de/politik/deutschland/article141387652/Kirchen-im-Strudel-von-Nettoverlust-und-Irrelevanz.html>

参考文献

- 鈴木大拙, E・フロム, R・デマルティーノ (1992) 『禪と精神分析』 現代社会科学叢書
越塚信行 (1974) 『ゲーテ・ファウスト第一部』 郁文堂
柴田翔 / 訳 (2003) ゲーテ『ファウスト 上・下』 講談社文芸文庫
柴田翔 (2009) 『闊歩するゲーテ』 筑摩書房
石原あえか (2010) 『科学する詩人ゲーテ』 慶應義塾大学出版会
伊東俊太郎 (1995) 『日本人の自然観 縄文から現代科学まで』 河出書房新社
伊東俊太郎 (2002) 『文明と自然』 刀水書房
村上陽一郎 (1980) 『日本人と近代科学』 新曜社
村上陽一郎 (1983) 『歴史としての科学』 筑摩書房
村上陽一郎 (2002) 『近代科学と聖俗革命』 新曜社
渡辺正雄 (2000) 『文化としての近代科学』 講談社学術文庫